



音楽家

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

1970年代、若者たちが北海道を目指す観光ブームの火付け役となったのは森繁久彌が作詞作曲した「知床旅情」です。浜口庫之助が作詞作曲し、石原裕次郎が歌った「恋の町札幌」も観光都市・札幌のイメージアップに大きく貢献しました。一方、札幌出身の梁田貞が作曲した童謡「どんぐりころころ」は今も子どもたちに歌い継がれています。こうした人々の功績を後世に伝えるため、ゆかりの地には歌碑とともに銅像が建てられました。

森繁久彌 映画の主人公に扮して

映画「社長シリーズ」「駅前シリーズ」で人気を博した俳優の森繁久彌が知床とかかわりを持つきっかけになったのは、戸川幸夫の小説「オホーツク老人」です。

知床の番屋で独り冬を越す主人公の彦市老人が、漁網をネズミから守るため暮らしをともにしたのがネコでした。厳しい自然の中で生きる姿に心を打たれた森繁は映画化を決意します。

森繁プロダクションの第1作として1960年3月と7月、知床半島でロケを行いました。撮影には羅臼の人たちがエキストラとして協力し、交流が生まれます。

撮影を終了し現地を去る前夜、知床の思い出を歌にして残したいと、自ら作詞作曲したのが「知床旅情」です。その時の題名は「さらばラウスよ」でした。

翌朝、旅館の前には森繁が書いた歌詞が張られ、見送りに来た人たちを前に、ギターを手にした森繁とスタッフたちによる合唱が始まりました。

地元の人たちも歌を覚えようと、2回、3回と繰り返すうちに、コーラスの輪は波紋のように広がり、送る人、送られる人のハーモニーがまち中に流れました。

この映画「地の涯に生きるもの」は10月に公開され、1960年度芸術祭参加作品となります。それから10年後の1970年11月、加藤登紀子が歌う「知床旅情」が発売され、翌年大ヒットします。

撮影当時、羅臼村長だった谷内田進はその後も頻繁に森繁と会い、親睦を深めました。2人は生まれがともに1913年で、しかも誕生日が森繁は5月4日、谷内田は翌日の5日。そのことをお互いが知っていたかは不明ですが、同じ世代同士、親近感が湧いたのでしょう。

谷内田は「森繁さんの功績をいつまでも後世に残したいと私はしばらく前から考えていました。そこで顕彰像を建てたいと一昨年、友人の安部（兵吾）羅臼漁協組合長さんや山本新作さん（羅臼漁協監事）に相談したところ大いに賛同され、佐藤（一）町長を交えて建立運動を進めることになりました」（北海道新聞釧路・根室版1978年10月14日）と振り返っています。

1978年春には森繁久彌顕彰像建立協賛会が発足、会

長には谷内田が就任しました。寄付金のほか町の補助金も得、1200万円をかけて銅像と「知床旅情」の歌碑を完成させます。

像を制作したのは北海道教育大釧路校教授、長谷川工。羅臼町内の教員に美術指導していたのが縁で、谷内田から依頼されました。映画フィルムを取り寄せてポーズを研究、学生10人と2年を超える大作を仕上げました。

建立場所は国後島を一望できる丘の「しおかぜ公園」。像は森繁が映画で扮した彦市老人をモデルにし、長い木の枝を杖代わりにして立っています。つまりこの像は森繁久彌像でもあり、「オホーツク老人」像でもあるのです。

1978年10月15日の除幕式に出席した森繁はしげしげと像を見上げ、「似てるなあ」とつぶやきました。

あいさつで「この酷寒の地に漁場を開いた先人たちの苦労はどんなだったでしょう。私は仮の姿をこの老人にお貸しただけ。でも私たちが世を去っても、この像は風雪に耐えこの国境のマチの平和を祈ってくれるのでしょうか」（北海道新聞1978年10月16日）と語りました。



銅像から少し離れて立つ「知床旅情」の歌碑

そして式の後「森繁さんは『どうです、歌いませんか』とマイクをにぎり、『知床旅情』を約七百人の町民とともに合唱。森繁さんを囲んだ大人や子供らの歌声は、膚に冷たい秋風によってオホーツクの海へと流れていった」（同）のです。

谷内田はそれから9年後の1987年、74歳で生涯を閉じました。1日早く生まれた森繁は2009年、天寿を全うし96歳で亡くなりました。像は今も風雪に耐えて立ち、平和を祈っています。

石原裕次郎、浜口庫之助 4度目の苦心作

「星のフラメンコ」「バラが咲いた」など数々のヒット曲を生み出した作詞作曲家の浜口庫之助が1971年、自ら出演していたNHKのテレビ番組「歌のグランドステージ」で披露したのが「恋の町札幌」です。翌年2月の札幌冬季五輪を意識したこの歌は10月以降、由紀さおりや菅原洋一らによって番組内で歌われました。

レコードが発売されたのは1972年5月。歌手の石原裕次郎は、浜口が作詞作曲した「夜霧よ今夜も有難う」をヒットさせるなど、俳優ばかりでなく、歌手としても名声を高めていました。

ただ、結核療養でしばらく休業していたため、再起を図る大事な機会でした。女心を歌う新境地の作品は期待通りの売れ行きとなり、五輪後の札幌は「恋の町」



「オホーツク老人」に扮した森繁久彌像

として再び全国から注目が集まりました。

歌碑の建設が持ち上がったのは、1990年12月に浜口が73歳で他界してからです。石原はすでに3年前の1987年、52歳の若さで亡くなっています。

札幌観光協会が寄付を募り、1千万円をかけて建設した歌碑はユニークでした。譜面と歌詞を刻んだ碑(高さ2.5m、幅1.8m)の上両サイドに、石原と浜口の胸像を取り付けたからです。

制作を依頼されたのは札幌在住の彫刻家坂坦道。札幌の石川啄木やクラークの銅像を手掛けた実績の持ち主です。しかし、あの人気俳優の容姿を復元し、似ていると納得してもらうのは容易ではありませんでした。

日刊スポーツ(1991年6月7日)によると、本来なら1カ月前に完成する予定でしたが、試行錯誤を繰り返し、ようやく関係者からOKが出たのは4作目。その作品は夫人のまき子が持っていたお気に入りの写真を基に仕上げました。坂は「作る前にたくさん写真を見たのが、かえって悪かったようですね」と語っています。

1991年6月6日、クラーク像のある札幌・羊ヶ丘展望台で行われた除幕式には、まき子と浜口の妻真弓が



「恋の町札幌」の歌碑。右上が石原、左上が浜口の像

招待されました。まき子は7月、小樽で石原裕次郎記念館を開館する大きなイベントが控えていました。新事業への期待と不安が交錯していた時期かもしれません。また、真弓は夫を亡くしてまだ半年。喪失感が癒えることはなかったでしょう。

「時計台の下で逢って…」という石原の甘い歌声が流れだすと、並んで着席していた2人はうつむきがちにハンカチでそっと目頭をぬぐいました。

石原裕次郎記念館は2017年8月、惜しまれながら閉館しましたが、石原は胸像として浜口とともに「恋の町札幌」に残り、往年の笑顔を振りまいています。

梁田貞 式を盛り上げた大合唱

札幌生まれの作曲家梁田貞は「城ヶ島の雨」「羽衣」「とんび」「どんぐりころころ」など数多くの唱歌、童謡を残しました。

一方、東京府立一中(現日比谷高校)、五中(現小石川中等教育学校)、東京音楽学校(現東京芸術大学)、成城学園などで教べんをとります。玉川学園創立者で玉川大学学長の小原國芳とは1922年から親交があり1948年、小原の招きで同大学教授に就きました。

教育者としての梁田を「立派な風貌! 潔癖すぎるほどの純潔さ。正直、純真、そのもの。教授の一節一節は全くステージで独唱なさるような真剣さ! 偉大な道德教育でした。宗教教育でした。人間感化でした」と小原は自著で絶賛しています。

感化を受けた小原や教え子たちが音楽碑建設に動きだしたのは1967年。同年6月、小原は札幌市長原田與作よしかに会い、音楽碑の建設場所を紹介してほしいと申し入れました。

9月には梁田貞先生音楽碑建設期成会が発足、会長には小原、副会長には梁田と同じ庁立札幌南中学(現札幌南高校)卒業の北海道放送社長阿部謙夫あべしずおが就任。事務局代表は札幌一中(同)を卒業し、梁田に進路指導を受けたテノール歌手で横浜国立大教授の奥田良三が務めました。

胸像制作は梁田の東京府立五中時代の教え子だった横浜国立大教授安田周三郎に依頼しました。

12月に作成した建設趣意書には、建設費を300万円とし、除幕式は梁田の命日に当たる1968年5月9日に札幌市で行うと明記しました。募金は札幌をはじめ全国各地から協力者が相次ぎ、目標を上回る525万円が集まります。

最終的に決まった建設場所は、梁田の母校、創成小学校（現資生館小学校）の正門脇。胸像の台座には小原の筆による「楽聖梁田貞先生」のプレートがはめ込まれました。右隣に置かれた黒御影石の音楽碑には、子どもたちがよく愛唱する「どんぐりころころ」の楽譜が刻まれています。

1968年5月9日午前、札幌の街に高校生たちの清らかな歌声が響き渡りました。創成小学校校庭で行われた除幕式で、玉川学園高等部2年生350人が梁田の作曲した「われら若人」を歌い上げたのです。

児童の代表らが梁田の胸像と音楽碑の幕を引くと、会場から一斉に拍手がわき、生徒の合唱は「どんぐりころころ」に切り替わります。これ以上の除幕式はないと思わせるほど圧巻で感動的な光景でした。

あいさつに立った小原は「梁田さんは本当に心のきれいな人でした。人々の心に幼き日の思い出を与えた名曲は、これからも永遠に歌いつがれるでしょう」（北海道新聞1968年5月9日夕刊）と感激し声をふるわせました。

除幕式後、午後からは市民会館で記念音楽会を開催。新琴似育英幼稚園の園児、創成小学校の児童、札幌南高校の生徒が歌い、奥田も梁田の「昼の夢」を披露しました。

フィナーレは玉川学園の生徒による大合唱。ステージを埋め尽くし、「城ヶ島の雨」「村の道ぶしん」など梁田作品10曲と国内外の民謡5曲を歌いあげました。

生徒たちの札幌公演が実現したのは、修学旅行の日程を繰り上げたから。学園の創設者、小原でなければできなかった劇的演出でした。



梁田貞の胸像。右隣が「どんぐりころころ」の歌碑

奥田は「式が終わっても『梁田先生追憶のつどい』というテレビ放送のため、私は二、三日残らねばならなかった。私はその間、何度かソッと一人でその像の前に行った。日暮の像、夜の像、何れも静かで美しかった」と回顧しています。

創成小学校は学校統合で2003年、資生館小学校となり、校舎も新しくなりました。それに伴い、胸像と音楽碑はグラウンド脇に移設。そばには歌碑に合わせてどんぐりの木、ミズナラが植えられています。梁田像はその生い茂る枝の下で、登下校する子どもたちを静かに見守っています。

（敬称略、肩書は当時のもの）

<参考文献>

- ・羅臼町史編纂委員会編「羅臼町史」羅臼町、1970年
- ・羅臼町百年史編集委員会編「羅臼町百史」羅臼町、2001年
- ・小原國芳「小原國芳全集 第29巻」玉川大学出版部、1963年
- ・梁田貞先生音楽碑建設期成会編「梁田貞先生音楽碑建設報告書」梁田貞先生音楽碑建設期成会、1969年
- ・岩崎呉夫「音楽の師 梁田貞」東京音楽社、1977年